季節と植物

1

どんな花がさき始めたか、どんな鳥やこん虫が渡来したかということから、わたしたちは、季節のうつりかわりを知ることができます。鳥やこん虫や自然のままの植物は、季節のうつりかわりをびん感に感じとっているからです。

三月のはじめになって、日ざしがあたたかくなりかけると、日あたりのよい野山や庭の土をもち上げて、ふきのとうがまるい頭をあらわします。鉄道の土手などにも、よく見かけます。ふきのとうは、ふきの花をつけるくきがまだのびていないものです。それが、やがてくきをのばし、花をつけるのです。

また、野山や庭には、まんさく、ろうばい、さんしゅゆなどの木が、木全体を黄色い花でかざります。これらの花は、葉が出ないうちにさくので、それこそ、木全体が花になったような感じです。まんさくという名前は、花が木にいっぱいさくというところからつけられたともいいますし、まず花がさくからそうつけられたものだともいわれます。春のおとずれとともにさく花に、黄色いものが多いのはおもしろいことです。

つづいて、白や紅色のうめがさき始め、少しおくれて、もも色のももの花がさきます。このころには、しんちょうげの花が、強いかおりをただよわせ、れんぎょうの黄色い花も見られるようになります。

さくらの花が、野山をうすもも色の雲でおうのは、四月のはじめです。そのころになると、こぶしやもくれんの、白むらさきの大きな花や、ゆすらうめの小さな花も、いっせいにさきだし、地面は、かわいらしいすみれやたんぽぽの花で美しくいろどられます。

花だんに目をうつすと、ヒヤシンスやチューリップなどの、色とりどりの花がさきみだれ、春はようやくまっさかりの時期となります。

これらの植物は、おもに東京附近で見られるものです。地方によって、春のおとずれを告げる植物も、そのさき始める時期も少しずつちがっています。

2

植物が、季節のうつりかわりをびん感に感じとるということは、どういうことでしょうか。

それぞれの植物は、芽を出したり花を開いたりするために、自分にちょうど合った温度や日光を必要とします。季節によって、温度や光の強さがちがいますから、植物は、それぞれ、自分につごうのいい季節に育って、花をつけるわけです。

麦をれいにとってみましょう。秋まき小麦は、秋にたねをまいて冬をこさせます。それなら、春あたたかくなってからたねをまいても同じではないかと思う人があるかもしれません。ところが、秋まき小麦には、春にたねをまいても、花がさいて実を結ぶまでになりません。おもしろいことに、秋まき小麦には、芽を出したばかりの時に冬の寒さにあわないと、花がさいても成長して実を結ぶまでにならないというせいしつがあるのです。

春のはじめにさくまんさく、ろうばい、さんしゅゆの花などは、花がかれては人間がかわそうだと思うそこのそばへもよりません。ひくい温度でないと花がさかないしくみになっているのです。

花の中には、春から夏にかけて昼が長くなるとさくものもあります。そうまめ、あさがお、クローバーなどがこのなかまで、これとはぎゃくに、秋になって昼が短くなり始めるとさかなくなります。こういうのは、秋まき小麦には、前もってめり気をあたえて芽を出させ、しばらく冬と同じ寒さの温度にしておけば、春にまいても、秋にまいたと同じように、よく育ち、実を結ぶということが、実げんでわかっているそうです。

季節と植物のかんけいはなかなかおもしろいものです。